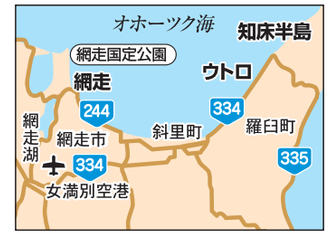
日本風景街道 ―輝く人たち― 2

シーニックバイウェイ 東オホーツク・ルート



▼広域的な取り組みの必要性

気温4度。12月初頭。真っ青に晴れ渡った女満別空港から北へ国道39号を10分走ると、道の駅「メルヘンの丘めぼんべつ」（網走管内大空町）がある。駅を過ぎると左手にジャガイモや小麦などの田園が広がり、丘に木立が横に並ぶ。道路わきに「P」とカメラのマーク。写真を撮るパーキング、「とるぽ」の標識だ。ここは全国初の有名な写真撮影専用駐車帯（ビューポイント・パーキング）で〝北海道らしい風景〟がそこにあった。

「北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会」が第5回会議を終えた直後の2004年9月、網走市、美幌町、女満別町（現大空町）、小清水町、清里町、斜里町、東藻琴村（現大空町）の関係者が「東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議」を組織した。05年5月、同地域は「東オホーツクシーニックバイウェイ」としてルートの正式指定を受けた。

この時、中心的な役割を果たした一人が大空町商工観光課長補佐（当時、女満別町商工観光室長）の山本勝栄さん(49)だ。「計画を聞き、広域的な取り組みの必要性を感じていたので、東オホーツクの魅力をアピールするチャンス、と思った」。清里町主催のフォトコンテスト事務局を担当していた奥山英明さん(63)と居酒屋で出会ったのが幸運だった。

「ルート指定された時、清里町のフォトコンテストを『シーニックバイウェイフォトコンテスト』と冠を変えることを理解していただき、これを起爆剤に多くの人に知ってもらえたのがよかった」。山本さんをシーニックバイウェイに駆り立てた原動力は写真だ。町役場に勤める傍ら、写真家集団の事務局長を務め、地域を代表する写真家として知られる。「ファインダーを通して東オホーツクを見つめてきたが、海と山の魅力が揃った所は他にありません。写真で見せるのが一番良いと考えたのです」

▼流氷の見える ビューポイント

清里町商工会事務局長として会議に参加した奥山さんは「町にはそれぞれ個性がある。山本さんの考えを聞き、面白そうだからやろうと思った。成功したのは自分の町より、広域的な視点で考えたからです」と語る。

東オホーツク地域が活動を始めたことと、05年7月の知床の世界自然遺産登録が相乗効果で、追い風に。当時、知床を抱える斜里町、羅臼町は世界遺産登録推進協議会が発足していたが、周辺自治体は合併特例法への対応で身動き出来ず、動きは鈍かった。事務局のまとめ役、奥山さんは「苦しい中、知床という世界的な財産を地域としてどう受け止め、守っていくか。シーニックバイウェイが地域がまとまる課題を与えてくれた」と話す。

07年11月、国交省北海道開発局網走開発建設部は網走市鱒浦の国道244号わきにビューポイント・パーキング「流氷街道・鱒浦」を開設した。同パーキングはメルヘンの丘、後志管内の京極町に続き北海道で3カ所目。「鱒浦」は海越しに知床連山を望み、冬は眼下に押し寄せる流氷が見られる景勝地。連携会議メンバーも参加したワーキンググループの成果だ。

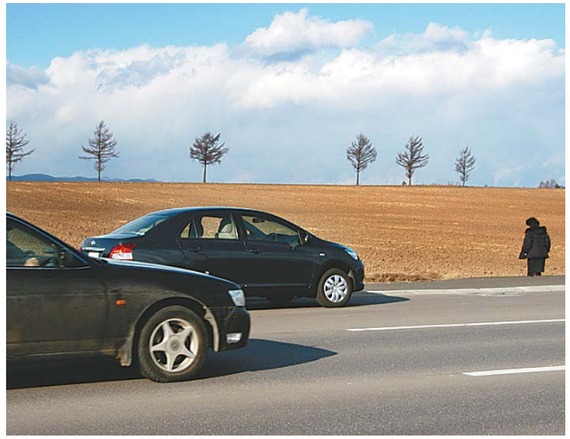
東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議代表の高谷弘志さん(55)が鱒浦を案内してくれた。高谷さんは札幌でJTBに勤めていたが、赴任していた知床や網走の自然に魅了され50歳で退職、網走を終の棲家に決めた。「オホーツクには六つの湖と六つの峠があり、湖、河、海がありシジミ、カキ、ホタテ、サケ、ボラ、イワナ、ワカサギが採れます」。釣りと乗馬が好きな高谷さんには堪らない土地だ。「女房は最初、反対でしたが、流氷が見え、空が真っ青、知床が見える素晴らしい環境」。「いま仕事は休業中」とあっさり言う。「考え方ですよ。多少おカネがあれば、何とか生活できます。僕にとって、東オホーツクは最

（次ページへ）

知床連山を背にオホーツクでウニを採る網走の漁民＝2007年12月、鱒浦で

情熱を燃やす4人のプロ

東オホーツクの風景街道作りに情熱を燃やす左から奥山英明、高谷弘志、山本勝栄さん＝清里町商工会で



写真を撮る駐車帯、女満別「メルヘンの丘」＝大空町

（前ページから）

高の場所」。知床連山を眺めながら語る高谷さんは、輝いている。

3年前、ワーキンググループの議論の中で鱒浦海岸に立つ電柱が気になった。「景観を邪魔する電柱は本当に必要か、地元と相談して撤去した。無粋な消波ブロックも見えないよう工夫しましたよ。「もう一つお見せしましょう」と海が見える小高い丘に。そこには牧場が広がっていた。「流氷の去る海明けのころ、ここから海上に『幻氷(げんぴょう)』と呼ばれる蜃気楼が見えます」。高谷さんにはロマンとパワーがみなぎっている。

▼市民を巻き込んだ計画で成功

藤崎達也さん(38)をウトロに訪ねた。NPO法人「知床ナチュラリスト協会」を立ち上げた藤崎さんはサラリーマンを辞め、26歳で東京から移住し12年になる。「日本中で自然が豊かな所は知床しかないですよ」。若い世代を代表する感覚でプロジェクトに参加した。

「道をキーワードにいろいろ繋げていけました。道だからどこまでも続く。そこが面白い」。働き盛りの藤崎さんは「共通していたのは広域連携の必要性、つまり戦略。そんな新しい自然保護のあり方を環境省にも訴えましたが、なかなか聞き入れてもらえません。シーニックではミッションが共有されていたので市民活動の経験をベースに作業を貫くことができました」と素直に笑う。

知床に魅了され東京から移住した藤崎達也さん＝ウトロで

網走市の海岸に完成したビューポイント・パーキング「流氷街道・鱒浦（ますうら）」は、高谷弘志さんら４人が参加した連携会議の成果。右側が国道244号＝2007年12月

「世界自然遺産の環境や景観、知床の玄関をテーマに話し合った。道の駅も番屋風に作り、アイヌの文様を組み入れる工夫もしました」。行動力は自信に満ちている。NPOは社員5人、アルバイト8人で運営。「流氷ウオーク」や「先住民族エコツアー」など体験型観光ガイドを実践している。「ガイドが一般的ではなかった頃は、有料にするのも大変だった。でも、いまはガイド付も常識になりました」。

北海道開発局が提言した構想について、高谷さんら4人はこう付け加えた。「決定の仕方、スピード、市民を巻き込んだ計画は結果的に成功でした」。その理由の一つが「参加者それぞれがテーマを持つプロだったこと」。「週1回、半年間。役員4人が中心となって指定に向けた作業を進めた」。その理由は「楽しかったから」であった。